独立行政法人 国立病院機構
呉医療センター・中国がんセンター

Vol.17
2024
May
令和6年5月

波と風

理　念

**思いやりのある
やさしい誠実な医療を
提供します**

基本方針

1. わかりやすい説明による安心・安全な医療を提供します
2. 最新の知識と技術による質の高い医療を提供します
3. 地域医療機関との連携を強化し、地域社会の発展に貢献します
4. 高度な専門性をもつ医療人の育成に努めます
5. 医療資源を適正に活用し、健全な経営を実践します

CONTENTS

2～7P　就任あいさつ
8P　令和6年度 辞令交付式について
9P　第15回 院内QC活動口演発表会
10P　第42回 院内研究発表会
11P　第14回 治験責任医師表彰について
12P　令和5年度 院内災害訓練を実施しました
13P　卒業前演習を終えて
14P　第59回 卒業式を終えて
15P　第62回 入学式を終えて
16P　令和5年度呉医療センター特定行為研修修了式について
17P　医療機器安全ニュース
18P　うちの部署の接遇キラリさん
19P　連携医療機関紹介（呉中通病院）
20P　我が家のスターたち
寄付について、編集後記

就任あいさつ

院長　繁田　正信

呉医療センターに通院、入院加療されている患者さん、当院職員及び関係者の皆様、この度、独立行政法人国立病院機構呉医療センターの院長を拝命しました、繁田正信と申します。この場を借りて、皆様に一言御挨拶を申し上げます。

私は、呉市出身で、辰川小学校（現在は廃校）、片山中学校、呉宮原高等学校を経て、昭和56年に広島大学医学部に入学致しました。呉は、まさに私の故郷であり、中でも呉医療センターは、高校時代の通学路に位置し、毎日の様に見てきた病院であります。幼少の頃、受診したこともあり、当時は下駄箱で靴を脱いで、病院のスリッパに履き替えていた事が懐かしく思い出されます。その後、泌尿器科医師になり、広島大学病院、県立広島病院他、いくつかの病院で研鑽を積み、平成18年（2006年）６月に泌尿器科科長として当院に赴任いたしました。呉医療センターへの赴任が決まるまでは、まさか自分の故郷、しかも高校時代の通学路にあった病院に勤める事になるとは考えた事もなく、驚きと共に、故郷である呉のために尽くしなさい、との神の啓示を受けた様な気が致しました。それから約18年の時を経て、この度、院長を拝命することとなりました。

呉医療センターは、昔から呉に住んでおられる方は良くご存知と思いますが、非常に歴史と伝統のある病院で、明治22年、1889年に呉鎮守府附属呉海軍病院として開院しました。大東亜戦争終結後、イギリス、オーストラリア軍に接収されておりましたが、昭和31年、1956年に国立呉病院として再開し、昭和40年、1965年に中国がんセンターを併設、平成16年、2004年に独立行政法人国立病院機構　呉医療センターと名前を変えて今日に至っております。呉海軍病院時代から数えて135年の、長い歴史のある病院であります。現在、呉医療センターはベッド数700床、1日の外来患者数924人、年間入院患者総数は約12,000人、職員数1,250人（医師176人、看護師622人）で、県内では広島市民病院、広島大学病院、県立広島病院に次ぐ4番目の大規模な病院として、広島県、特に呉市及びその周辺の地域の医療を支えております。

新型コロナウイルス感染症は、令和５年５月に５類に移行して、インフルエンザと同様の扱いとなり、以前のような厳重な検査、隔離は必要なくなりましたが、依然として感染は治まってはおりません。現在は、３A病棟、７B病棟にそれぞれ３床ずつ、新型コロナ感染症患者用の部屋を確保しておりますが、それ以上の感染者が発生した場合には、一般病床を利用して運用しています。同室者から陽性者が発生した場合には、陽性者以外の方は、感染が否定されるまでは半隔離状態となり、不自由をお掛けしますが、他者への感染防止のため、ご協力いただきますよう、ご理解の程、宜しくお願いいたします。

令和６年４月から、いよいよ医師の働き方改革が始まります。日本の医療は、医師の長時間労働によって支えられていた面が多々ありましたが、そのために過去、医師が心身に障害を受けたりする事例が発生し、これを防ぐために、長時間労働を一定時間内に制限するものです。私が医師になった頃は、若い医師は休みを取る事は罪であり、常に患者のために働く事が当然と言われ、実際に行われておりました。しかし、時代の流れとともに、少子高齢化が進み、働き手の数が年々減少している現代において、医師（労働者）の健康を守る必要が生じて来たのだと思います。より高度に複雑化する医療現場において、徹夜の当直や手術、処置等の後に、疲労が蓄積している状況下で、間違いを犯す事なく医療を継続することを求めるのは難しいのです。そのため、長時間労働の制限や、今まで医師のみが許可されていた様々な業務を、他の業種の方でも可能に出来るなど、業務の分散化も進められています。今の医療水準を落とす事なく、これらの改革を確実に進めていきたいと思っております。

今後の呉の医療、さらには日本の医療を支えるためには、患者さんを含めた多くの職種の方々の協力と理解が必要です。私はまだまだ未熟者で、十分な知識も持ち合わせず、誤った判断をすることもあろうかと思います。皆様のご指摘、諫言を真摯に受け止め、正しい方向に少しでも向かう事が出来れば、と固く決意しております。何卒宜しくお願い申し上げます。以上をもちまして就任の御挨拶とさせていただきます。

就任あいさつ

副院長　大庭　信二

この度、４月１日より副院長としての新たな役割を拝命いたしました。統括診療部長在任中から引き続いて呉医療センターの未来に貢献できることを大変光栄に思います。

私は平成19年１月に広島大学付属病院から当院脳神経外科科長として赴任いたしました。赴任直後より、リスクマネージメント部会の委員長、臓器移植対策委員会委員長・院内移植コーディネーターに任命され、医療安全について学び、院内での医療安全啓蒙活動に参加させていただきました。さらに、当院では初めてとなる、脳死下臓器提供事例も経験いたしました。更に、その後しばらくして、新たに教育企画室長に任命され、数年間コーチング宿泊研修を企画し、実行してきました。その場では多くの各職場長の方々と共に、相手を承認することの重要性や、傾聴と質問のスキルを学ばせていただきました。平成26年からは医療技術センター部長として、若い人達のための医療技術研修・教育に携わってきました。

平成31年から統括診療部長に任命され５年間、院長・副院長を支えてきました。その間、新たに外来運営委員会を設けてその委員長として、外来業務・外来環境の改善に努めてきました。また、特にコロナ感染症流行下では、呉市内の他病院に先駆けてコロナワクチン院内接種を企画し、実行致しました。この時、医師、看護師、薬剤師と病院事務が一致団結すれば、安全に迅速に何でもできることを本当に実感いたしました。

私は日頃の診療においては、常に“その医療行為に正義はあるか”と自らに問いかけるようにしています。そうすれば、必ず良質な医療を提供できると信じています。そして、呉医療センターが呉医療圏で中心的役割を果たし続けることができるよう、引き続き努力する所存です。働き方改革が叫ばれる中、各職場におかれましては何かと困難なこともあろうかと思いますが、どうか、これからも皆様の変わらぬ支援と協力をお願い申し上げます。

就任あいさつ

統括診療部長　立川　隆治

この度、本年４月より統括診療部長に就任致しました。2014年４月に当院に赴任し、10年が経過し、年長医師の仲間入りとなり、このたび命を受けました。

私は県北の出身で、中学・高校も地元の広島新庄に通いました。呉地区に所縁はなく中国労災病院で初めて呉での生活を経験しました。その後も大学病院、市立安佐市民を経て済生会呉病院で勤務しており大学病院を除いたほとんどの勤務先が呉地区となり、このまま定年を迎えると地元の県北で過ごした年月を上回りそうです。慣れ浸しんだこの地区でより長く勤務をさせて頂くことは幸せに思いますが、この度命じられた責務は重大で、これまでの外科系の統括診療に加え内科系の診療・運営にも携わることとなり、更には日常診療の問題や運営上の課題を挙げてその解決をお願いするというこれまでの立場から解決をするという立場へ変わり、その膨大な業務を考えると身がすくむ思いです。幸いにも身近に前任の先生がおられるので、対応に苦慮した場合には前任の先生や周りのスタッフの意見を聞きながら可能な範囲でより適切な対応をするよう努力してまいります。

コロナ感染症が５類になったとはいえ、病床運用への影響は変わらず残っており、臨機応変な診療体制が要求されます。また資材や光熱費、物価の上昇は老朽化しつつある建物や医療機器の修理・更新へも影響しています。資金を効率よく投入しつつ、限られたスタッフを外科系・内科系の先生方と連携をとりながら効率よく配置し、安心で安全な医療を提供することができる様努力して参りますので、宜しくお願い致します。

就任あいさつ

看護部長　郷原　涼子

４月１日付で南岡山医療センターより異動してまいりました郷原涼子と申します。どうぞよろしくお願いいたします。呉医療センターには令和２年に副看護部長として勤務をさせていただきましたが、その頃はコロナ禍で病院での様々な行事がほぼ開催できない状況の中での１年間でした。この度３年ぶりに呉医療センターで勤務させていただくこととなり、また今回は看護部長という職責から緊張や不安も感じておりますが、以前一緒に勤務をした看護師長さんや、副看護師長さんから「お帰りなさい」と声をかけていただきとても嬉しく思っています。そして病院周辺の満開の桜と人の温かさに触れながら、職責を果していけるよう気持ちを引き締めて仕事をさせていただこうと思っております。

呉医療センター・中国がんセンターは大規模病院で呉二次医療圏の中核を担い、担う役割も多様です。求められる役割をしっかり果たしていける看護部である様、これまでの良いところは継続し更に成長し続けられる部門でありたいと思っています。

思いやりの気持ちを大切にし、根拠のある看護の実践、対話のあるコミュニケーションのとれた職場環境であるよう看護部全体で取り組んでいきたいと思います。看護師ひとり一人が自律し考え行動できる看護師の育成に尽力し、忙しい中でも、細やかな気配り、配慮ができ、患者さん・ご家族が安心して入院生活をおくることができるよう、また働くスタッフにとってもやりがい感をもち、呉医療センターで働き続けたいと思ってもらえるよう、精一杯頑張っていきたいと思いますので、どうぞご指導ご支援のほどよろしくお願い申し上げます。

就任あいさつ

薬剤部長　小川　喜通

この度、岩国医療センターより異動して参りました小川喜通と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

呉医療センターでの勤務は７年ぶり２度目となります。以前は、副薬剤部長として８年間勤務させて頂きました。

現在では、薬剤師が病棟に当たり前のように常駐しておりますが、その当時は、全国的にも一部の病院でしか病棟薬剤師が配置されておりませんでした。当院でも病棟に薬剤師を配置することとなりましたが、ノウハウも無く人員が少ない中、どのように業務を効率化し薬剤師を配置するか、苦労をしながら取り組んだことを思い出します。色々な問題に追われる日々でしたが、皆さまのお力添えのおかげにて他の国立病院に先駆けて開始することができました。翌年には診療報酬にて点数が付くこととなり、努力が報われることとなりました。また、色々なチーム医療を経験させて頂きました。その一つとして薬剤師外来の開設にも関わることができました。薬剤師外来という名前は、非常に堅苦しいイメージがあるため、患者さんに少しでも身近なものと感じて頂きたく、名前を「お薬外来」と名付け開始しました。お薬外来を始めて早くも10年が経過しました。呉医療センターに帰ってきたこの機会に、今年の診療報酬改定にて診察前の薬剤師外来に対して点数が付くことになり、非常に嬉しく感じております。

今回、これらの思い入れ強い呉医療センターに、改め勤務できることを大変光栄に思っております。患者様に安全で安心な薬物療法が提供できるよう、またこれまで以上にチーム医療に貢献できるよう努めてまいりますので、ご指導ご鞭撻をよろしくお願いします。

就任あいさつ

医療技術センター部長　吉田　成人

この度、令和６年４月１日より医療技術センター部長・内視鏡内科科長に就任致しました吉田成人と申します。

出身は広島市で平成4年に広島大学を卒業し、その後広島大学病院、広島赤十字･原爆病院、安佐市民病院（現広島市立北部医療センター）で臨床研修を行った後、広島大学第一内科（現　消化器内科）に18年間勤務しておりました。大学病院時代は消化管内視鏡診療、特に消化管超音波内視鏡診療を積極的に行い、また研究としてはAI内視鏡開発を主に行っておりました。その後JR広島病院に赴任した後は幅広く消化管診療を行っておりましたが、AI内視鏡開発は継続して行っており、現在も広島大学　消化器内科、広島大学　ナノデバイス研究所、名古屋工業大学と共同研究を行っております。JR広島病院時代は炎症性腸疾患の診断と治療および消化管腫瘍の内視鏡診断と治療に特に力を入れておりました。

現在、潰瘍性大腸炎やクローン病などの炎症性腸疾患の分野では様々な薬物療法が開発され、昔では考えられないようなQOLの高い生活を送っていただけるようになっています。現在も分子標的薬など多くの新規薬物が開発されていますので、積極的に取り入れていきたいと考えております。また、消化管腫瘍の内視鏡診療に関しても様々な機器や術式が開発され、以前は内視鏡治療が困難であった病変も内視鏡的に根治が可能となっております。消化管疾患で気になることがある場合はご相談いただければ幸いです。患者さんにはガイドラインを基本とし、時にはその先の高度な治療も受けていただけるよう努めてまいります。

微力ではありますが呉地域の医療の充実に少しでも貢献できればと考えておりますので、今後ともよろしくお願い致します。

就任あいさつ

臨床研修センター部長　大下　智彦

令和６年４月１日より臨床研修センター部長に就任いたしました。

私は令和４年４月に脳神経内科の科長として当院に赴任いたしましたが、着任時より臨床研修部室長の任を授かり前任の水之江先生のもとで初期研修医の教育に従事させていただきましたが、このたびは重責を拝命し身の引き締まる思いです。

平成16年に臨床研修制度は必修化され、プライマリ・ケアの基本的診療能力を身につけるため専攻科を決めずに二年間様々な科を回ることを特徴とします。当院では一時期定員割れした時代もあったのですが工夫を重ね、近年ではフルマッチが続いており、現在２学年で25名前後の研修医が所属しております。所属先をもたない研修医は時として単なるお客様になるリスクがあるのですが、当院では救急現場での診療を核として、“Go Beyondのキャッチフレーズのもと”研修医が自分で考える･動ける”ようになることを目指しております。また、日々の指導を通じて社会人としての常識も身につけさせることも重要な使命と考えております。医師を育てることは臨床研修部のみで達成できるものではなく、病院上層部、各診療科・各部署の皆様、地域研修先の医療機関からのご支援が不可欠であり、何より患者様・ご家族のご理解にささえられています。これまで臨床研修部の柱であった水之江前部長・桑井先生が去られ、心配な点は多々ありますが、鈴木先生（外科）、水本先生（内視鏡内科）、荒木先生（呼吸器内科）とともに研修医教育に努めてまいりますのでこれまで同様のご支援賜わりますようお願いもうしあげます。

就任あいさつ

がんセンター・がん診療部長　熊谷　正俊

令和６年４月１日よりがんセンター・がん診療部長に就任致しました熊谷正俊と申します。水之江知哉先生の後任として産科科長・婦人科科長を務めさせていただくため14年ぶりに呉医療センターに戻りました。昭和デビューの古参医師が無役ではいけないとのご配慮があっての部長就任と心得ております。

私は呉に愛着があります。出生は山口県ですが、昭和63年に広島大学を卒業し広島大学産科婦人科学教室に入局間もない７月から、国立呉病院で産婦人科研修医として２年弱を過ごし基礎を学びました。呉出身の妻との出会いもこの時期です。平成13年から22年まで呉医療センターで中堅医師として2回目の勤務をさせていただき、この時の多数の婦人科がん症例を基に婦人科腫瘍専門医になりました。次の7年間は県立広島病院で婦人科がん手術を多数執刀し、次の６年間は広島市立安佐市民病院（現、北部医療センター安佐市民病院）で腹腔鏡下手術とロボット支援手術を多数経験し、早期子宮体がんに対する低侵襲手術の術者要件も満たしました。３回目勤務となる今回は低侵襲手術も含めた長年の経験を後輩婦人科医に伝えたいと思います。

がんセンター・がん診療部長の肩書からは、他科のがん診療にも関わらねばならぬことも重々承知しています。既にがんゲノム医療が導入され、科別や臓器別だけではなく遺伝子変異に対応した薬物療法が行われる時代になりました。従来の抗がん剤に加え､分子標的薬が次々と導入され、起こり得る有害事象も多岐にわたるため、医師だけでなく、がん薬物療法に精通した薬剤師、看護師の育成が急務と思います。手術においては当院もda Vinciサージカルシステムが導入されており、運用には臨床工学技士や手術室看護師との協力体制が不可欠です。がん診療は手術、薬物、緩和治療のいずれも多職種によるチーム医療が基本と考えます。良いチームが多く生まれ、より良いがん診療を提供できるよう努めてまいりますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

就任あいさつ

経営企画室長　寺尾　秀二

この度、令和６年４月１日付で岩国医療センターから経営企画室長として着任しました寺尾と申します。よろしくお願いします。

出身は鳥取県で、現在は海田町に居を構えています。呉医療センターでの勤務は２回目となります。平成22年４月に外来係長、平成25年４月から５年間、管理課業務に携わっていました。今回は６年ぶりの呉医療センターになります。

以前の勤務地の岩国医療センターは車で片道約60km、自宅から高速道路を使って通勤していました。呉医療センターへは距離が３分の１となり通勤時間も短くなりうれしく思っています。今は電車で通勤しており、呉駅から病院までの風景を懐かしく思いながら歩いています。

さて、病院経営においては新型コロナウイルスの影響で患者数の減少など厳しい経営となっております。業務上、様々なことをお願いすることがあるかと思いますがご理解・ご協力をお願いします。微力ではありますが少しでもお役に立てるよう尽力して参りますのでご支援・ご指導のほどよろしくお願いします。

就任あいさつ

副看護部長　　坂本　栄美子

令和６年４月１日より浜田医療センターより異動して参りました、坂本栄美子と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

出身は、島根県江津市です。国立福山病院附属看護学校で学び、勤務地は浜田と松江の2ヵ所の経験です。初の山陽方面の勤務であり、緊張して参りましたが、病院内で迷子になっていると、職員の皆さんに「お困りですか？」と声をかけていただき、安心して仕事を始めることができました。

呉医療センターでは、約10年前の看護師長時代に「がん看護研修」を受講させていただきました。許可なく自宅に帰っていたがん患者さんの事例のロールプレイングを通して、こちら側の言い分を伝える前にまずは「相手の気持ちに共感すること」が大切であると学び、看護管理実践に活かしてきました。私の原点の研修となっています。

病院の理念は、「思いやりのあるやさしい誠実な医療を提供します」とあります。この理念のもと患者さんが安心して療養できる環境、職員が安心して働ける環境を整えていきたいと思います。

力不足の点は多々あるかと思いますが「やらずに後悔するよりもやって反省すべし」の精神で取り組んでまいりますので、ご支援ご指導のほどをよろしくお願いいたします。

就任あいさつ

作業療法士長　山本　弥生

この度、令和６年４月１日より賀茂精神医療センターより異動して参りました山本と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

私は幼少期から青春時代までを呉市で過ごしました。大空山で花見をしたり、レンガ通りでショッピングをしたり、フライケーキをほお張ったり…たくさんの懐かしい思い出がよみがえります。

そして呉医療センターとのご縁ですが、すでに閉校したリハビリテーション学院に４年間、７年前に４年間呉医療センターに勤務させていただきました。

今の心境ですが７年ぶりの呉医療センターでの勤務にあたり身の引き締まる思いです。呉医療センターは「思いやりのあるやさしい誠実な医療を提供します」という理念のもと病院運営されています。理念を心にとどめリハビリテーション科スタッフとともに患者さんに寄り添いながら質の高いリハビリテーションを提供していきたいと思っています。加えて多職種の方々との連携を大切にするチーム医療へも貢献していきたいと思っています。

呉医療センターの一員として微力ながら精一杯努めて参りますので、ご支援・ご指導のほどよろしくお願いいたします。

令和6年度 辞令交付式について

給与係長　宗内　佑樹

４月１日㈪に採用、転入、昇任された職員に対して「令和6年度辞令交付式」が執り行われました。

総勢169名と多くの参加者がいたため、昇任・転入・採用の職員で時間と場所を分けて開催しましたが、事前に管理課内で役割を決めてシミュレーションを行うことで当日はスケジュール通りに進行できました。

また、看護部と協力することで受付およびオリエンテーション会場設営についてもスムーズに行うことができました。

各会場ではじめに繁田院長より一人ひとりに辞令が手渡され、その後にそれぞれの職場での活躍へ向けて激励の言葉が贈られました。

今回の辞令交付式の参加者は、様々な思いを胸に各職場で業務に邁進しておりますが、呉医療センターは今年度も「思いやりのある、やさしい誠実な医療」を病院理念として患者さんへ高度な医療を提供してまいります。

第15回　院内QC活動口演発表会

院内ＱＣ活動運営委員会　委員長
副院長　　大庭　信二

令和６年１月31日に院内QC活動口演発表会を開催し、107名と多数の方にご参加いただきました。

今年度は、院内QC活動に全8題のエントリーがあり、令和５年11月29日から令和５年12月11日でポスター掲示と、全職員を対象とした一次投票が行われました。発表会では、上記投票により決定した上位６題の口演発表が行われ、二次投票の結果は次のとおりとなりました。

受賞区分	タイトル	部署
最優秀賞	血液製剤廃棄率０への取り組み ～搬送BOXの見直しによる効果の検証～	臨床検査科
優秀賞	感染撲滅―回診車なくしてみた―	６A病棟
３　位	めざせ！ミニマリスト ～外科的血栓除去術に必要な物品の見直しを通して～	３A病棟
特別賞	MTS（待たせない）プロジェクト第３報！ ～採血の回転率UPで待ち時間短縮へ～	外来
特別賞	PBPMを知っていますか？	薬剤部
特別賞	あなたは誰の受け持ちですか？	７B病棟

また、投票の集計時間には、「令和６年能登半島地震　呉医療センター　医療班活動ルポ」と題して、災害派遣医療チーム（DMAT）木下先生から活動報告をして頂きました。

現地の被害状況、避難所及び被災者の医療ニーズ、対応した症例と行った対策等、詳細な報告があり、参加者の皆さんは真摯に聴講されていました。

第42回　院内研究発表会

臨床研究部長　　讃岐　美智義

本年度の院内研究発表会は、令和６年１月27日土曜日に開催されました。下瀬院長による開会挨拶に続き午前９時より発表が始まり、合計15演題の報告がありました。内訳は、症例発表７演題、臨床研究２演題、業務改善事例３演題、基礎研究２演題、特別講演１演題でした。これらの分類は演題申し込み時の申請に基づいています。特別講演は臨床研究部長の讃岐美智義先生による「医療とチャットGPT」でした。筆頭発表者の職種別人数は、図１に示す人数となっています。参加者は67名で参加者の所属分布は図２で示す割合となっています。

総評として、終始和やかな雰囲気の中で活発な討論が交わされました（図３）。今年度も多くの職種から発表がありました。普段見ることができない職種間での討論を行う事ができ、今後当センターの臨床研究がより精度の高いものになると期待されます。またこれらの成果を展開し、積極的に論文化していくことも重要だと考えられます。

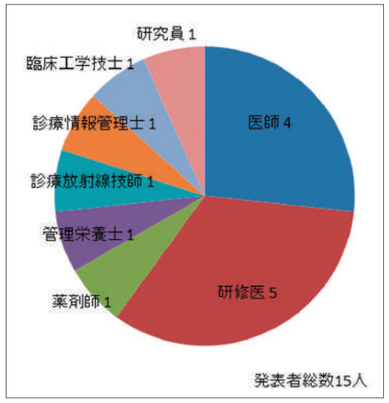


図１　発表者職種別人数

後日の幹部会議にて優秀発表３演題が決まり、管理診療会議にて表彰を行いました（図４）。
優秀発表演題は以下の通りです。

① 心血管撮影装置における撮影プロトコルの見直し
〇田盛雅英[1)]、森川祐介[1)]、瀬井葉奈[1)]、逸見茉由[1)]、三宅慎太郎[1)]、稲葉　護[1)]、稲葉　護[1)]、高木一成[1)]、二見智康[1)]
[1)] 放射線科

② 透析エコーガイド下穿刺用プローブカバーコスト削減に関する取組み
〇岩崎光流[1)]、多賀谷正志[1)]、髙橋俊介[2)]
ME管理室[1)]、腎臓内科[2)]

② 胆道癌根治切除症例におけるTMPRSS4を用いた予後解析
〇柴田祥之[1)]、首藤　毅[1)]、田妻　昌[1)]、小野倫枝[1)]、福田崇博[1)]、宮田柾秀[1)]、藤井友優[1)]、佐田春樹[1)]、谷峰直樹[1)]、嶋田徳光[1)]、田澤宏文[1)]、鈴木崇久[1)]、尾上隆司[1)]、清水洋祐[1)]、倉岡和矢[2)]、山本利枝[2)]、田代裕尊[1) 3)]
[1)] 外科　[2)]病理診断科　[3)] 副院長

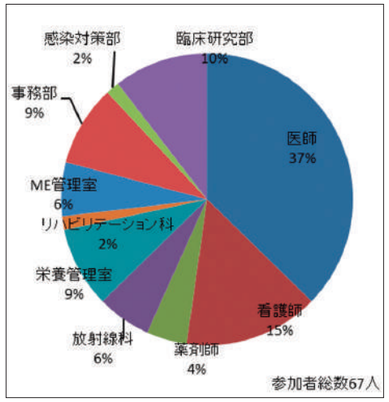


図２　参加者比率

図３　会場光景

図４　表彰光景

第14回　治験責任医師表彰について

治験主任　矢野　圭悟

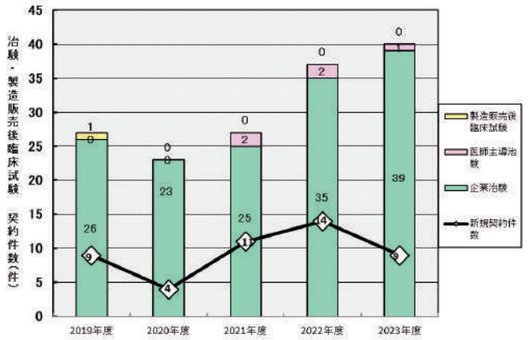
2024年３月の管理診療会議にて2023年度治験責任医師表彰が行われました。治験責任医師表彰は2010年度から開始されており、1年間で最も治験に貢献された治験責任医師を表彰しております。

2023年度は毎週の被験者対応に加え、診療科別の治験実績（請求金額数、同意取得数）において消化器内科がNo.1であったことを称え、当科科長の河野博孝先生が受賞されました。（この日は河野博孝先生が不在の為、代理で当科医師の寺岡雄吏先生に授賞式へご参加いただきました。）

当院では昨年度は11診療科で40試験(企業主導治験：39試験、医師主導治験：１試験)とここ５年で最高の契約件数となり、COVID-19の影響で低迷していた治験実施状況も回復の兆しにあります。

治験は臨床試験という一面だけではなく、既存治療が無効の患者さんにとっては新たな治療選択肢になればという想いで治験管理室一同日々の業務に励んでおります。今年度も引き続き多くの試験を受託し、医師の先生方・患者さんにひとつでも多くの治療の選択肢を提供できればと思っております。

治験は治験管理室だけでは実施できず、医師の先生方・各部門のスタッフの皆様のご協力の上で成り立っております。この場をお借りして感謝を申し上げますと共に、引き続き治験管理室の円滑な運営にご協力をお願いいたします。



令和5年度 院内災害訓練を実施しました

前 財務管理係長　永田　佳也

令和６年３月２日㈯、ＢＣＰに基づく院内災害訓練を実施しました。当院は地域災害拠点病院に指定されており、定期的な訓練の実施が義務づけられています。令和４年度はコロナ禍のため規模を縮小した訓練を実施しましたが、令和５年度はコロナ禍以前と同規模の訓練を企画しました。

訓練を実施するにあたり参加者には講義を受講いただき、災害医療・訓練について理解を深めていただきました。また、傷病者役・患者家族役・帰宅困難者役の職員・学生には設定や演技についてレクチャーし、より実際に近い形での訓練となるようにしました。

今年度の訓練想定は、令和６年３月２日㈯８時15分　室戸沖を震源とするマグニチュード8.0の南海トラフ地震が発生。呉市震度６強。当院の建物の被害は無く、ライフラインは正常で、電子カルテも通常使用可能との想定で実施しました。

発災が土曜日ということで、まずは当直者が救急外来に集合し院長を始め病院職員を集めるところから始まりました。院長等幹部職員が集まったところで申し送りを行い、１階医事課内に暫定対策本部を設置していきます。地震発生で出勤してきた職員はあらかじめ指定されているエリアに集合し、リーダーが状況説明を行い受け入れ準備を行います。これまでの訓練の経験より、救急外来入り口にトリアージエリア、救急外来に赤エリア、生理検査室に黄色エリア、外来ホールに緑エリア、リハビリテーション科（２階）に黒エリア、体育館に帰宅困難者・家族待機場所を展開します。特に黒エリアと体育館は初めての試みで、その効果を検証しました。

被災者の受け入れが開始するとトリアージを行い、各エリアに搬送します。搬送は、救急隊と職員が協力して行います。各エリアでは初期治療を行ったのちに、病棟、手術室、ＩＣＵなどに搬送を行います。レントゲン撮影、ＣＴ撮影が必要になる被災者については模擬で撮影依頼を行い、撮影室まで搬送することで結果がわかる形にしました。黒エリアでは新たな試みとして本物の警察官に来院いただき、死亡被災者への対応（検視）についても訓練しました。暫定対策本部では人、物、情報の管理を行う中で、架空テレビ局（クレテレビ）の取材対応を行うなど臨機応変に対処をしました。

訓練終了後、振り返りを行い、実際に訓練を行うことで見えてくることが多々あり、「患者登録に時間がかかってしまう」、「動線が悪かった」、「各エリアには連絡用員が必要ではないか」、「プライバシーを確保できないところが気になる」などの意見があがりました。最後は、評価者として参加いただいた中国労災病院ＤＭＡＴより、安否確認の必要性についてお言葉をいただきました。これらの結果・意見をＢＣＰに反映させようと思います。

令和６年１月１日㈪能登半島地震が記憶に新しいところです。災害は正月、夜関係なく発生します。近年、地震に限らず風水害など様々な事象が発生しています。呉圏域の地域災害拠点病院としての役割を果たすためにも、今後も実際に即した訓練を続け、来たるべき時に備える必要があると改めて感じたところです。

最後に、院内外合わせて総勢210名近くの方々に参加いただきました。ご協力いただきありがとうございました。

黒エリア

診療エリア①

診療エリア②

本部

卒業前演習を終えて

前 呉医療センター附属呉看護学校　教員　東　活年

看護師国家試験が終わり、卒業に向けて３年生は、卒業前演習を行いました。今回の卒業前演習では、臥床患者での採血の手技と臥床患者の寝衣交換、シーツ交換を行いました。採血の授業では座位で実施したことはありますが、ベッドサイドに準備して実施したことはありませんでした。臨地実習の時に寝衣交換やシーツ交換は何度となく行っていますが、臥床状態でのシーツ交換は、実際に実施した学生もいれば、実施できていない学生もいました。

原理原則をもとに個別性を考慮しながら安全・安楽に援助を行い、対象の自立をうながすような声掛けを行うことで、対象の持っている残存機能を活かし協力を得ながら演習を行うことができました。これまでの臨地実習での体験を生かし、本日の演習での学びを大切に看護師として成長していくことを願っています。

臥床患者のシーツ・寝衣交換の場面

臥床患者の環境を整える場面

臥床患者の採血の場面

第 59 回 卒業式を終えて

前 呉医療センター附属呉看護学校　教員　東　活年

令和６年３月１日に病院職員、学校職員、保護者の方、在校生が参列のもと第 59 回卒業式が挙行されました。学校長の式辞で、「看護師には、『強い体力と精神力』、『学び続ける姿勢と向上心』、『コミュニケーション能力』が求められます。相手の話を『正しく理解する力』と相手に『正しく伝える力』や、患者のちょっとした変化に気づくことができる『観察力』と患者の気持ちをイメージする『想像力』が必要です。そして、常に『自ら考えて行動していく姿勢』をもってください。」と述べられました。

卒業生代表の答辞では、臨地実習での体験をとおして、「うまく会話ができない対象に対し、思いを汲み取るだけでなく、その人らしく退院後も生活できるように支援する大切さを見出すことができたと思います。」と述べ、対象に寄り添う事の大切さ、共感する事の大切さを関わりのなかから学んでいました。

３年間での学びを胸に、自分を支えてくださったすべての方へ感謝の気持ちを忘れずに、今後の看護師人生を歩んで頂き、成長できることを願っています。

第 62 回 入学式を終えて

呉医療センター附属呉看護学校　教員　奥田　真由美

令和６年４月９日、暖かな春の訪れとともに38名の新入生を迎えました。今年は来賓の方々もお招きし、新型コロナウイルスが流行する前の通常の式典を挙行することができました。当日は小雨が降っていましたが、看護学校の前の道路が桜の絨毯で埋め尽くされており、新入生は緊張の中にも心躍るものがあったのではないかと思います。入学式では、新入生の晴れ姿を保護者の皆様、来賓や病院職員の方々に見守っていただき、安堵しています。また、在校生は新入生の姿に、１、２年前の自分自身を思い返しながら初心に戻るとともに、先輩としての自覚を抱くことができたのではないかと思います。

式典前はリラックスした様子で過ごしている新入生もいましたが、式典が始まると、皆やや緊張した中にもこれからの期待とやる気が入り混じるような表情となりました。私は新入生が安心して学校生活を送ることができるよう、また看護師への道を歩む思いをより高めることができるよう支援していきたいと改めて思いました。学校長は「かけがえの無い友と、これから３年間、共に学び、励まし合い、支え合い、楽しいこと、悲しいことを沢山経験して、立派な看護師になることを楽しみにしています」と式辞を述べられました。看護学校の３年間は授業、実習、学校行事と目まぐるしく過ぎていくと思います。これからの３年間、38名の新入生が皆で支え合い、知識や技術を高めながら、多くの経験を積み重ね、様々な思いを共有することで、豊かな人間性を育むことができるように、私たち教職員は常に学生に寄り添う存在でありたいと思います。みなさま、どうぞよろしくお願いいたします。

令和5年度呉医療センター特定行為研修修了式について

前 庶務係長　中山　裕文

３月19日㈫に「令和５年度呉医療センター特定行為研修」修了式を行いました。（下記写真参照）

当日は院長や副院長、特定行為研修の責任者である救命救急センター部長をはじめとした10名の関係者及び受講生３名で執り行われました。

今年度の研修は令和５年６月よりを開始され、約10カ月間の研修生の頑張りの結果、無事3名ともに修了することができました。

当院では令和３年度より「救急領域パッケージ」研修を開始し、今年度の研修生も含め６名の修了生を送り出すことができました。また、令和５年度より「末梢留置型中心静脈注射用カテーテル管理」通称PICCを開講し、この度１名の修了生を輩出することができました。

PICCの特定行為研修は近隣の他医療機関でも開講されておりますが、当院の症例数は非常に豊富で他施設での研修と比較して多くの症例数を学べると自負しております。今年度もPICCの特定行為研修を開講予定しており、今後も開講を続けていくこととしております。

この度研修を修了した３名の看護師には所属病院に帰って現場で活躍いただくとともに、特定行為を行える看護師のモデルケースとして、特定行為研修を各方面に広めていっていただければと思います。

当院では今年度も特定行為研修を開講する予定としており、今後も臨床現場で活躍できる特定行為研修の修了者を増やしていきます。

修了式の様子

記念撮影

医療機器安全ニュース

現代の医療では生命維持や治療に医療機器は不可欠です。これらの医療機器も操作や管理を誤れば重大な事故を招き、死に至るケースさえあります。

ＭＥ管理室では、医療事故防止、安全対策の向上を目的とした医療機器安全ニュースを年に２回発刊しています。

第26回『テレメトリー式心電送信機』

本装置は連続的に生体情報(心電図、呼吸、SpO2、血圧)をモニタリングし、**セントラルモニタに伝送する小型送信機**(以下、送信機)です。

ZS-910P　ZS-930P　ZS-630P　ZS-640P

図１　各種送信機

呉医療センターでは日本光電株式会社製の送信機を4種類使用しています(図１)。

各機種でモニタリング可能な項目は異なり、ZS-910Pは心電図のみ、ZS-930PとZS-630Pは心電図、呼吸数、SpO2を、ZS-640Pは心電図、呼吸数、SpO2、非観血血圧をモニタリングすることが出来ます。

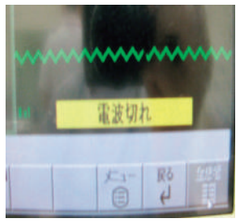
電波の特性・注意点

本装置の電波の強さ（送信周波数）は、送信機本体とセントラルモニタ側の受信機との距離に反比例して減衰し、建物の構造や環境によっては電波が届かなくなります。電極リード線（図２）が電波を送信するアンテナの代わりとなるので、SpO2のみを測定する場合でも電極リード線は接続しておくことを推奨します。また、電波の送信・受信はチャンネルが設けられており、送信機同士の電波混在が無いように管理されています。

なお、本装置の周囲で携帯電話や小型無線機などを使用すると、それらが発する電波が干渉し誤った測定値をモニター表示する場合もあるので送信機付近での携帯電話のご使用はお控えください。

図２　電極リード線

・セントラル側で発生する「電波切れアラーム」について



【原因・対処】

① 送信機の電源がオフになっている。
⇒電源をオンにしてください。

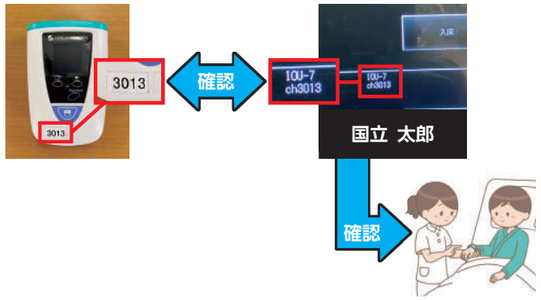
② 心電図の電極リード線が送信機本体に接続されていない。
⇒電極リード線がアンテナの役割をしているので、電極リード線を接続してください。

③ 心電図の電極リード線が断線している。
⇒電極リード線を交換してください。

④ 送信機が電波の届かない距離にある。
⇒電波の届く距離で使用をしてください。

・患者誤認を防ぐために

心電図等の生体情報は検査・治療を行う上で重要であり患者誤認を防がなければなりません。そのために、入床の際には「患者名」、「送信機のチャンネル番号」、「セントラルモニタのチャンネル番号」をそれぞれ間違いが無いか確認して患者様に装着してください。



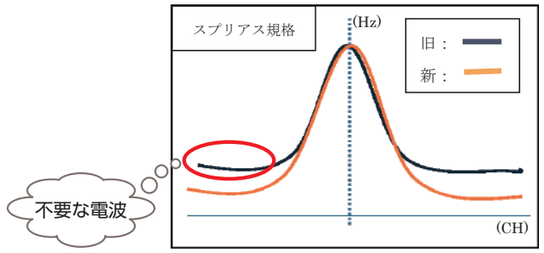
・電波法の一部改正

電波法は電波の公平かつ能率的な利用を確保して、公共の福祉を増進する目的で制定された法律です。この法律の改正により、旧スプリアス規格に該当する送信機は期限を過ぎて使用すると罰則が生じます。現在、総務省からは新型コロナウィルス感染拡大等の社会的状況を踏まえ使用期限が明確には示されておらず「当分の間延長」となっております。

(総務省 電波利用ホームページ；
https://www.tele.soumu.go.jp/j/sys/others/spurious/index.htm)

しかし、今後期限が定められ旧スプリアス規格の製品は使用できなくなります。現在使用している機器を調べるためにも、メーカーに問い合わせることを推奨します。

※スプリアスとは、本来必要とされる所定の周波数帯を外れた「不要な電波」のこと。国際的な定義の変更により新旧2つの規格が混在しており、新スプリアス規格は引き続き使用可能です。



縦軸：周波数(Hz)、
横軸：周波数帯域(チャンネル)

うちの部署の接遇キラリさん

看護部
５Ａ病棟
看護師
西宮　世那さん

５Ａ病棟は整形外科病棟で手術を目的として入院される患者さんが多くいらっしゃいます。退院後の生活を見据えて安心して退院できるよう入院前の生活スタイルや今後の希望、目標などを聞き、それぞれの患者さんに合わせた看護ができるよう日々コミュニケーションを大切にしています。疼痛コントロールを行いながら、リハビリのサポートをすることで、徐々に歩けるようになって笑顔で退院される患者さんをみるととてもやりがいを感じます。
これからも患者さんに合わせた看護が提供できるよう日々の関わりを大切にしていきたいです。

西田　５Ａ病棟看護師長より

西宮さんは、どんなに忙しい時も笑顔を絶やしません。患者さんだけではなく、誰に対しても丁寧に対応しています。整形外科病棟は日常生活が困難になった患者様が多くいらっしゃいますが、どんなに忙しくても患者様の話に耳を傾け、寄り添う看護ができています。優しい西宮さんは、後輩たちの憧れの先輩です。

看護部
７Ｂ病棟
看護師
菊川　あみさん

７Ｂ病棟には抗がん剤治療や脳梗塞により入院される患者さんがいます。治療による苦痛、ADL の低下、日常生活の変化による落ち込みがあり、感情が不安定になる患者さんも多くいます。そんな中、明るい気持ちになり、前を向けるよう笑顔で寄り添うことを大切にしています。これからも患者さんの身近な存在として、笑顔で明るい看護を提供していきたいです。

久田　前７Ｂ病棟看護師長より

菊川さんは入職後の慣れない環境で緊張している中でも、誰に対しても笑顔を絶やさず、明るい姿が印象的でした。それは今も変わらず、どんなに忙しい時もいつも笑顔で丁寧に対応してくれています。そんな菊川さんの笑顔に元気をもらっています。これからもその笑顔でみんなを癒し、支える存在であってほしいです。

治験管理室
事務助手
山本　初枝さん

治験管理室では、患者さん、製薬会社の担当者、当院のスタッフ、その他いろいろな立場の方と接する機会があります。前職まで医療とは無関係の職でしたので、接遇時に言葉を聞き取ることで精いっぱいになりがちですが、どの方にも丁寧に相手の立場になって対応できるように心がけています。
患者さんの健康と、スタッフの皆さんのご活躍の一助となれるよう、業務に励んでまいります。

讃岐　臨床研究部長より

山本さんは製造販売後調査事務局と倫理審査委員会事務局として書類作成・確認を行っております。治験管理室を訪れた被験者さんやMRさんにはいつも笑顔で接し、電話対応も丁寧かつ誠実です。治験管理室は患者さんだけでなく院内関連部署や治験依頼者とも広く関わる仕事であり、これからも笑顔を絶やさず頑張ってほしいです。

中央放射線センター部
診療放射線技師
逸見　茉由さん

中央放射線センター部では、レントゲン検査やCT検査、MRI検査など、多くの画像検査を行っています。他の職種の方より、一人の患者さんと関わる時間は比較的少ないと思います。そのため、患者さんとの一期一会の出会いを大切に日々の業務をしています。また、患者さんは様々な事情や背景があることを忘れず、安心して検査をして頂けるように、丁寧な声掛けを行い、寄り添った接遇ができるように、今後も心掛けていきたいと思います。

二見　診療放射線技師長より

逸見さんは、患者様はもとより、看護師さんなど他職種の職員に対しても常に笑顔で誠実な対応をされています、忙しい業務の中でも彼女の周りは程よい緊張感と穏やかな空気の入り混じるとても良い雰囲気になっています。毎日の気持ちの良い挨拶やテキパキと業務に取り組まれる姿は、スタッフのお手本となる存在です、温かい雰囲気にいつも癒されています。

連携医療機関紹介　呉中通病院

院長　中川　豪

呉中通病院院長の中川豪です。私は、父が1977年（昭和52年）まで国立呉病院の初代脳神経外科部長を務めていたため、国立呉病院で生まれ、７歳まで青山町の国立病院官舎で過ごしました。1995年（平成７年）に広島大学医学部を卒業し、以後整形外科医として各地の拠点病院で勤務し、2007年（平成19年）より呉中通病院に勤務し、2021年（令和3年）８月に院長に就任いたしました。そのような経緯から、今でも私にとって呉医療センター・中国がんセンターは非常に愛着があり、身近な病院です。

当院は2007年８月に中川病院と中川脳神経外科病院が法人合併をした際に、中川病院から呉中通病院に名称変更し、脳神経外科と整形外科を中心とした回復期の病院としてスタートしました。現在、当院は回復期リハビリテーション病棟103床と一般病棟20床の計123床で運営しています。入院患者の多くは呉医療センターをはじめとする急性期病院から転院して来られた患者さまで、生活に復帰するためのリハビリを中心に行っています。

質・量ともに充実したリハビリを行うために、広い理学療法室、模擬住宅を擁した作業療法室、５つの言語治療室を備え、87名のリハビリセラピストがマンツーマンで訓練を行っています。病院すぐそばの堺川沿いが公園になっており、屋外歩行訓練で移り行く季節を木々の色で感じつつ、患者さまとセラピストが歩く光景を目にされた方も多いことでしょう。

おかげさまで現在の在宅復帰率は87.4％と高く、退院された多くの患者さまが自分らしい生活を再び営んでいます。また、当院は地域包括ケアシステムの一翼を担うべく介護との連携にも力を入れています。2019年（令和元年）には居宅支援事業所を開設し、訪問リハビリを開始しました。脳神経外科、脳神経内科、整形外科、内科の外来では、近隣のクリニックから当院の設置されている1.5テスラのMRI、80列のCT、全身型の骨密度測定器などの医療機器を用いた精査依頼のご紹介もいただいております。

これからも、和やか笑顔と思いやりのある話し方で人に接することを意味する「和顔愛語（わげんあいご）」を座右の銘とし、呉市民の医療・健康寿命増進に邁進していきたいと思っておりますので、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

医療法人社団中川会
呉中通病院
〒737-0046　広島県呉市中通１丁目３番８号
院長　中川　豪

我が家のスターたち

下垣伊都ちゃん

保護者コメント

伊都ちゃんは我が家のアイドル、何でも自分でやってみたい頑固な性格で、お手伝いをしてくれる優しいところもあり、甘えん坊の時は魚のようにピチピチはねる、元気いっぱいの女の子です。

すずらん園に入園して登園初日、１日中泣いていた伊都ちゃんは、登園５日目に泣きながらも「母さんバイバイ」ができました。10日目には先生に手を伸ばして行き、２か月目には泣かずに登園できるようになりました。

初めての運動会では泣きながら走り切り、ゴールで先生とお友達が囲んでくれました。社会進出の第一歩があたたかく優しい保育園で本当によかったです。

最近はまだ覚えたての言葉の言い間違いがかわいくて「伊都ちゃん語録」を直せずにいます。

これからもたくさんのお友達や先生に出会って大きく成長してくれることを願っています。

担任保育士のコメント

ダンス大好き、歌うの大好きないとちゃん。

気がつけば踊って、歌って…そのほとんどが自作のダンスや歌で、毎日笑わせてもらっています。

たまに恥ずかしくなっちゃうのか、ピタッとやめてモジモジ…そんな姿もかわいいです！

表情も豊かで友だちと変顔ごっこをして笑い合い楽しく遊んでいます。

これからも元気で明るい、いとちゃんでいてね！

信岡 紬ちゃん

保護者コメント

よちよち歩きの、少し緊張した顔で入園した紬ちゃん。

今では、保育園に行く事を楽しみに毎日登園しています。

家に帰ると、保育園で習った歌を歌ったり、今日はこんな事したよ～♪とニコニコ笑顔で話してくれるのを聞くのが楽しみです。

大好きなお友達、大好きな先生と楽しく過ごさせてもらい感謝でいっぱいです。

紬ちゃん、持ち前の明るさと笑顔でこれからもどんどん大きくなってね!!

担任保育士のコメント

お当番さんの仕事が大好きな、しっかり者の紬ちゃん。

お友だちにエプロンを広げて渡してあげたり、絵柄を揃えてお皿を配ったり、丁寧な仕事っぷりに感心させられます!

おしゃべりがとっても上手になり、「いらっしゃいませー!どれにしますか?」とごっこあそびも本物さながらです!

天真爛漫で元気いっぱいな紬ちゃん。これからもたくさん笑って、すくすく大きくなあれ!

呉医療センターへご寄付をいただきました。

令和６年１月～３月の間に、寄付をいただきました。

◆ご寄付　匿名１名（臨床研究の推進、救急医療・透析医療の連携）

気持ちのこもったご支援をありがとうございました。

編集後記

私事ですが呉医療センターに着任して２年目になりました。通勤時、病院敷地内にある桜の木が満開になっているのを眺めながら１年が経過したことを実感しております。また、ストラップの色が１年目の緑色から２年目以降の黄色に変わり、周りの方からの見方も変わると思いますので、そこに応えられるよう、これまで以上に業務に努めていく所存です。本年度もどうぞよろしくお願いいたします。

（広報委員会）

〒737-0023 広島県呉市青山町3-1　　発行責任者　呉医療センター・中国がんセンター院長　繁田　正信
https://kure.hosp.go.jp/